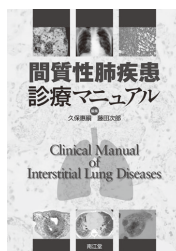


書評

〔評者〕
宮城征四郎
群星沖縄臨床研修センター長



間質性肺疾患診療マニュアル

久保恵嗣・藤田次郎 編

B5判 頁344 2010年
定価 9,450 円(本体 9,000 円+税)
[ISBN978-4-524-26231-1] 南江堂刊

この度、南江堂から久保恵嗣、藤田次郎両教授による『間質性肺疾患診療マニュアル』が刊行された。330 頁に及ぶ一大大作である。

編者によると間質性肺疾患は典型的には両側びまん性の疾患であり、その病態は判明しているだけでも実に 200 以上を数えるという。頻度は人口 10 万対 10～20 人であり、わが国には 1.3～2.6 万人の患者がいることになるが、呼吸器を専門とする臨床家が最もその鑑別に苦慮する病態である。

わが国では 1950 年代に早くもこの疾患群に着目し、独自の研究班が組織され「肺線維症診断の手引き」が発刊されている。欧米でもまた、すでにそのガイドラインが作成されて臨床家に提供され、広く一般化されている。

1980 年代には胸腔鏡下肺生検(VATS)が開発され、1990 年代になると日本発のヘリカル CT(HRCT)が導入されて、現在ではこの疾患群の clinico-radiologic-pathologic diagnosis(CRP 診断)が事実上可能となった。

この書は、この疾患群に関する歴史的な背景を踏まえた集大成である。

編者はこの書を刊行するにあたり、実に 60 人余のこの分野における専門家達を動員している。それはこの疾患群が、編者のみでは手に余る専門的かつ広範な基礎知識を必要としていることを意味している。

臨床的なアプローチに終始していた初期の段階か

ら、今では HRCT を中心とする画像上の解釈に基づく分類、VATS に基づいた組織学的に正確な診断が治療を含めた臨床に必須である時代に突入した。

大事な点はこの書の編者達の人脈の広さである。

日本の何処そくに、この疾患に関する超専門的な知識とアプローチのノウハウにたけた人が存在するということを熟知しているものでなければ、このように多くの専門家たちを動員できるはずがない。このお二人の文献渉猟能力にまずは瞠目しなければならない。また、この編者らとそれぞれの筆者達が常々、深い親交を結んでいるのでなければ、彼らがこの一冊の作成にこれほどの情熱を注ぐはずがない。

われわれ読者はその点を忘れてはいけないと思う。

第 4 章の「病態と治療マニュアル」各論においても編者らは多数の専門家達を動員して、各人が持つ深い知識と洞察力を引き出しているが、その記載方法は見事に統一されて居り、病態、診断手順、治療と処方例、管理のポイントの順序は臨床家にとって実に役立つアイデアである。

各著者達がその精力を注ぐ余り、多少、超専門的に過ぎた感を免れないが、びまん性肺疾患を見るときに、画像上の特徴を先ずつかみ、正確な診断を進めて行くうえで、大いに参考になる専門書であり、各医師達の書架に加えるべき一冊である。